

珍しく山行記（滝谷第4尾根）

TENSION 井上好司

行先 : 新穂高から滝谷を遡行、第4尾根を登攀し、北穂高南稜テント場へ。

目的 : 新穂高の麓(標高 1,100m)から穂高の主稜線(標高 3,100)まで滝谷を詰める。

行程 : 大阪→新穂高→滝谷避難小屋→滝谷→第4尾根→北穂高南稜テント場→涸沢
→上高地→新穂高→大阪

結果的に北穂高南稜テント場へ丸3日かかる。4日目上高地へ下山。

日程 : 2017年8月10日夜～14日（4日間）

メンバー : 足田吉継（CL）・井上好司・松田明博（隊長）

50歳で海に出だし、その翌年から山に入りだした。

メインは海。山は海の合間に片手間に入るといった感じだった。ところが3年ほど前に片手間でやっていたは太刀打ちできない処に首を突っ込んでしまった。1年アルパインクライミングの基礎的な事をやったが、片手間でやっていたは全く歯が立たなかった。山を始めた頃の目標の一つだったジャンダルムを登ったらもう山はこの程度にしてこれ以上高見は望まず、海に専念しようと思っていた。

その後1年以上全くクライミングシューズを履かなかったが、何がきっかけだったか、どうもこのままではけったくそ悪いと思い始め、昨年8月西穂高から奥穂高まで縦走した後からは海を犠牲にしてほぼほぼ毎週クライミングシューズかアイゼンを履いて過ごすことに。目標は夏の八ッ峰6峰Cフェース。昨年9月、それまで登ったことのなかった劔岳の山頂で八ッ峰・源次郎・北方稜線を目に焼き付けてきた。

だから今回の行き先は八ッ峰を希望したが、お盆の八ッ峰は混雑が予想されるので隊長の松田から却下された。松田から提案されたルートは新穂高から滝谷を遡行して第4尾根に取付き、北穂高へ。滝谷の様々なルートを登攀する場合、現在では北穂高南稜テント場を早朝出発して登攀取付き地点まで下降し、そこから登り返すというルートが一般的である。滝谷はどうも寒くて暗いイメージがあって僕には苦手意識があり、まして麓から滝谷を北穂高まで詰める行程は例年以上に雪渓も残っており困難が予想される。僕に行けるのだろうか不安な気持ちがあったが、松田や校長の中川が行けると判断したのだから行けるのだろうか。ただ山行を自分で行く山行とついて行く山行の二つに分けるなら、本来は例え学校の実技だとは言え自分で行く山行がしたい。はたしてこのルートを自分で行く山行として登り切れるか？雪渓も白馬の大雪渓しか知らない僕には明らかに経験不足は歪めないと思った。ついて行く山行になってもテント泊装備を担いで本当に稜線まで到達できたら達成感はこの上ない。Sea to Summit ではないがこれぞアルパインクライミング。挑んでみようと思った。

バリエーションルート・アルパインクライミング。僕の周りの山岳会では本来の意味とは違った意味でこれらの言葉が使われている。誤解を恐れず大雑把な言い方をすれば、一般道ではないルートがバリエーションルート。フリークライミングではない岩登りがアルパイン。そんな意味で使われているように感じる。

おそらく「こじんまりまとまった、つまらない山屋」から「学校の実技でこんな危険な山行をすることは問題だ」というマイナスの意見が出ることを、松田は想定していながらあえてこのルートを提案していることに僕は気付いていた。山屋としての心意気とでも言えばいいか？僕はそんなことを感じつつ松田と一緒にこのルートに挑んでみたいと思った。

もう一つ小さな課題だが、今回僕がリードするピッチではカムを多用するつもりでいた。松田も校長の中川もナチプロを若干軽んじているところがあるように感じている。この話も書き出すと長くなるので省くが適当なクラックがあれば既設のハーケンよりクラックにカムを突っ込んでプロテクションを取る登攀をしたいと思っていた。

4 日間の山行の概要

今年の梅雨明けは7/20ごろ。それから夏らしい暑い日が一週間ほど続いたが、太平洋上の本州南岸で迷走・停滞する台風5号の影響で再び梅雨入りしたのかと思われるような天候が続く。7/30から6日間かけて赤石山脈を南の畑薙ダムからおおよそ中間の三伏峠まで縦走したが、その6日間も晴れるのは稜線上だけで、しかも長くて早朝の1~2時間、南から流れ込む湿った空気が温まるとガスが上がりくもり、午後からは雨、発雷の心配はないという天候だった。

台風5号は既に北海道のさらに北に去ってはいたが、この山行の4日間もおおよそ同じような天候の予報で、午後から雨になるかも知れないが登攀に影響を及ぼすほどには降らないだろうと予想され、8/13の3日目だけ弱いながらも高気圧が通過するため一日晴れ間が多いであろうという予報だった。

滝谷の様々なルートを登攀する場合、現在では北穂高南稜テント場を早朝出発して登攀取付き地点まで下降し、そこから登り返すというルートが一般的だが、実際今回のルート上で踏み跡はスノーコルの手前までなかった。少なくともこの1週間避難小屋から詰めたパーティはいないようだった。また第4尾根を登攀の為に北穂高からス

ノーコルに下ってきたパーティは1組2名のみだった。中途半端に残った雪溪がクライマーを拒んだということかもしれない。

この3日間を振り返ってみれば中途半端に残った雪溪、もろく崩れた岩、浮石の巢窟のような岩稜帯、恐ろしいルートだった。海旅ならこのようなコンディションの海況を避けるルートファイディングをしながら先に進む。風待ちもせず、潮待ちもしないで潮渦巻く鳴門海峡に突っ込んでいくような山行だった。と言っても潮渦巻く海にも潮目があってルートファイディングが必要なように、雪溪の上を歩くか、へつるか、スノーブリッジをくぐるか、高いリスクを避けるルーファイが必要、そんなハイレベルな山行だった。

4 日間の山行記録

記録の一部・ルート図・概念図・天気図・テクニカルノート等は紙面に限りがあり割愛する。

(疋田さんのレポートを参照下さい)

1 日目 全略

2 日目 早朝～ 前略

1350 左側に第3尾根の末端が確認できた。左側に第3尾根、右側に第4尾根。沢の左俣と右俣の出会いだ。

このまま右俣の雪渓に上がり、雪渓をまっすぐに歩いていけば、スノーコルの下部に着くはずだが、どうも雪渓の状態が良くないようだ。雪の厚さが薄そうで、歩くのが危険そうだ。しかも雪渓から第四尾根のガレ場に取りつくところの雪がかなり薄い。右側の第四尾根の下部をへつって（トラバースして）いくのも困難そう。

悩んだ末松田は「雪渓の上に行くか？」と僕たちに同意を求めているのか？自分に言い聞かせているのか？よく分からないがそう言った。その言葉に対し僕が「雪渓、この薄さで大丈夫なん？」と言ってしまった。「ほんだらやっぱり左から行こか。」と松田。結局左側の第3尾根をへつり（トラバース）気味に登って行くことにした。松田も迷っていたのだろう。

しかし、ここのガレ場は浮石の巣窟で、まともに歩くのができないぐらいの悪ルートだった。浮石だらけのⅢ級ルート。ロープを出したいところだが支点を取ることもできない。まともに固定された岩などほとんどない。ホールドしたい位置にある岩にそっと手を添え、足を置きたい位置にある岩の真上からそっと体重をかけ、でも全体重がかからないように慎重に、3点支持のうちの1点は常にそんな支持しかできないようなところだった。一步づつ一手づつ気遣いをしつつ進む。もう後戻りはできない。ここでかなり時間を食ってしまった。

「しまったなあ、雪渓上を歩いたらよかったなあ、ルートファインディングのミスや、情けない。」

松田が何度も言う。そう言っている尻から右下にある雪渓のブリッジが前触れもなく崩れる。ブリッジの下には大量の雪解け水が流れている。幅約25m、長さ100m以上のこのスノーブリッジの下を進むという選択肢はなかった。その沢に落ちると10秒で冷たさが肌を刺し心臓が止まるまで1分持たないだろう。その間に救い上げることもまず無理だろう。

ドッスン！「松田さん、ブリッジ落ちたで！」と岩稜帯を選んだことが正しかったんだと僕が言うと「あんな危ないところ歩るけへん！」と松田。落ちたのは幅25mほどある雪渓の右側の岩稜帯に接した幅約4m長さ6m程度。確かに僕でも岩にほぼ接したあの崩れた場所は進むルートとしては選ばないだろう。

右の第4尾根を見上げると、スノーコルらしき地点が確認できだした。第3

尾根を下り、雪渓とガレ場を横切り、第4尾根に取付く。人の踏み後がある。スノーコルへのルートだ。C沢右俣のガレ場から第4尾根を200mほど登って、やっとスノーコルに到着した。ルート上のC沢を渡渉する地点で水が取れた。

1625 スノーコル到着。

早速、テントを張る。これからの夕食、明日の朝食、明日の行動用の飲料水の分量の水を先程の渡渉地で給水する。

夕食を取りながら明日の行動についての確認。遅く見積もって穂高の主稜線まで6時間。昼頃には決着できるだろう。明日は疋田・井上の二人でルートファインディングを担当、リード・ビレイを交代しつつ繰り返す。「明日は頼むでえ」と松田もホッとしたのかずいぶん饒舌だった。確かに本チャンの第4尾根登攀よりここまでのアプローチの方がはるかに困難だったように思えた。明日は時間も十分あるしここまで来たら明日はクライミングを大いに楽しもう。そんな思いでいた。

3日目 1P~5P 略

6P(1100)IV(20m) 井上リード ビレイ疋田 3rd松田

Cカンテからツルムのガリーをピナクル左少し手前を目印に登る。ピナクルの手前、登り始めてから20m付近に次の支点用のピンあり。ピナクルより先はピナクルの右側、ツルムのコルを抜けて懸垂下降の支点へ。

支点の3m手前で最終プロテクションを緑のカムで取り2歩右へトラバースして右脚を浮石に置く。3日目にして浮石に足を置くことにあまり躊躇しなくなっていた。真上から足を置き重心を真下に掛ければごまかしが効く。そういうあやしい登り方を覚えてしまっていた。今までうまくいっていたが今回はダメ。右脚に重心を移した瞬間、浮石の下の草を含む泥土が崩れ浮石とともに滑落。幸い3m程度の滑落で事なきを得る。滑落の瞬間、最終のカムの効きに自信があったので絶対止めてくれると確信しながら落ちた。

7P(1230)III(25m) 疋田リード ビレイ松田

ピナクル左少し下から右にトラバースしてピナクルの右側から乗越す所まではリードの疋田の姿が見えるが、その先は岩に隠れて見えない。その後はツルムの肩(懸垂支点)へトラバース気味に登るはずだが、ロープは伸びるのだが疋田の音が全く遠ざからない。松田が疋田に状況の説明を求めるが「ちょっと待って！」を連発。懸垂用の支点に到達したと返事があるがその音がとても近くから聞こえる。支点構築をしているようだがロープアップが全然されない。状況がつかめないまま時間だけが空しく過ぎていく。僕は寒くなってカップを着た。その後北穂南稜テント場まで寒くて脱ぐことはなかった。

13時を遥かに過ぎて松田が疋田にロープをフィックスするように指示。フィックスロープを松田がプルージックで登る。疋田は全くミスルートしていたようだ。方向の違う方へ下っていたらしい。懸垂支点を求めて下ってしま

ったと後から疋田の談。その後疋田をビレーしていた支点で待機中の僕が松田のビレーをして松田が懸垂支点のあるツルムの肩まで登る。松田のビレーで僕が疋田の所まで登り、疋田・井上の順で一人ずつツルムの肩へ。

懸垂下降(1430) 懸垂のスタート地点のハング気味の乗越しが気持ち悪い。

8P・9P(1530)Ⅲ50m 松田リード ビレー井上 2nd疋田

Dカンテの登り。10m直登後正規のルートを通らず、右に10mトラバースして支点構築。疋田・井上の疲労度を鑑み、核心部である最後のDカンテを避けるルートを松田が選択した。

10P(1630)Ⅲ40m 松田リード ビレー井上 2nd疋田

さらに右に10mトラバース後スラブを登攀。最終支点へ。

1810 最終支点に全員到着。フリーで一般縦走路へ。

1900 一般縦走路に到着。

2020 北穂南稜テント場に到着。ビールを求めて北穂小屋に寄ることもせず、水場にも寄らず、テント設営後食事も取らず、全員即落ちるように眠る。

4日目 全略

結局、自分で行く山行ができたのは3日目第4尾根の1Pから6Pまでだけ。それ以降は松田に登らせてもらう登攀だった。また1日目2日目は松田の後について行く遡行だった。もし自分ですべてを決定しながら登っていたなら2日目の前半、ナメリ滝か雄滝の辺りのロープを出す手前で撤退していたと思う。これ以上進んだら戻れないぎりぎりところ。

滝谷は僕を暖かくは迎え入れてくれなかった。とはいえ拒絶された感覚はない。むしろ己をしっかり磨いて改めておいで、とでも言っているような大きさを感している。

とても大きなリスクと責任を背負って臨んだ松田は山行を終えてどう思っているだろうか？僕にはよく分からないが松田には感謝している。おそらく一生心に残る山行になるだろう。

ついて行く山行とは言えとにかく稜線まで登り切る実体験をしたことは大きい。アルパインの初心者ルートと言われる、例えば前穂北尾根や北穂東稜のコジラ・源次郎などの縦走ははっきりとイメージできるようになった。山のコンディションが悪くなければ、自分で行く山行をするのに何ら不安はない。八ツ峰はフェースを登って帰るより縦走したいと思っている。